

▽二十九日 彦を連れて鎮守の北にのぼる、二間半ばかりの崖崩れを木の根丈けなりと除けんとてなり、みき子も連れて登る。

(いつしかも我が身の丈けに生伸びぬ接木の柿の青々として)

(あふら散る森の徑を朝行けばせむらぎ涼し空にひびきて)

午後南の山へ崩壊見に行く、歸途田の浦のはま邊に腰を下ろしてゆるき南風に對す、清想頻りに動けども詩ならず、鉛筆スケッチして歸る。

五時過とし子ら三人歸宅、賑はしき宵となれり。

青葉の下、ひるみき子が墓所詣の途に採りし磯草鉢植にせられであり、夕ぐれに見る海邊の花は色涼し。

○雨の日や門提げて行くかきつばた (信 徳)

夜更けて遠く砲の響あり。

▽三十日 濕れる空氣低う地に下りて胸心地わるき日なり。

連日の鬱氣いやが上に氣を塞ぎて我が心聊か沈む、晴れたる日旅行したし。

樽、醬油道具などの黴を洗ふ、雲は四天にふさがりて青き空見せねど雨はふらず。

午後茶の間の火鉢の側に轉寢す。

(お八ツして枇杷など剥きつ窓べりに憩ひてあれば楠の香ぞする)

日中寫生に出掛けんかと思ひしかど中止、午後栓切りなど、重苦しき體あちこちに持運かねつ。

鷄一羽病む。

○陣釜に子子湧いてゆたかなり

(橋 叟)

松江にて

日の出館といふ指定旅館で、第一回茶話會があつた、宍道湖に臨むだ涼しい家だ、廣い座敷に集まつたのは四十餘名、お茶にお菓子におすしと、御馳走澤山だ、まづ名のり合が始まる、私は……に始まつて何分宜しく……が終りだ、二三の話があつて後に、建築學の自稱大家MS先生の宍道湖觀が、奇想天外的態度と口調とによつて演説せられた、一同大に傾聽否洪笑を餘義なくせられた、次にはベースの彌次歌あり、南洋歌あり、散會は十一時頃であつた。

■大下氏著『水彩寫生旅行』は、本誌讀者に限り、一冊送料共金壹圓九拾七錢を以て、春鳥會に於て取次販賣すべし。該書は、發行部數あまり多からず、故に速に御注文ありたし。

■『瀬戸内海一週』は、製本出來、日本橋區馬喰町興文館より發賣されたり、定價二圓七十錢、特價金二圓二十錢なり、春鳥會及日本水彩畫會會友に限り、當分のうち貳圓を以て註文に應ずべし、但別に送料十二錢を要す。